新版

あゝ野麦峠

ある製糸工女哀史

山本茂実

新版

あゝ野麦峠

ある製糸工女哀史

山本茂実

朝日新聞社

山本茂実（やまもと・しげみ）
大正6年（1917）長野県松本市生れ。松本青年学校教師，松本連合青年団長となり神田塾を主宰。昭和23年上京，早稲田大学文学部哲学科に学ぶ。人生雑誌「葦」，「小説葦」，総合雑誌「潮」などを創刊。各編集長をつとめる。現在は作家として執筆生活。
〈主なる著書〉
「喜作新道」（朝日新聞社）
「高山祭」（朝日新聞社）
「人間の出発」（青春出版社）
「私を支えた母の一言」（青春出版社）
「街道・風土と伝説の旅」（角川文庫）
「松本連隊の最期」（角川文庫）
絵本「野麦峠をこえて」（ポプラ社）
〈現住所〉東都都小平市仲町 263

書　名　新版 あゝ野麦峠—ある製糸工女哀史—
定　価　740円
発行日　昭和43年10月10日旧版第1刷
　　昭和47年12月20日新版第1刷
　　昭和54年10月10日新版第25刷
著　者　山本茂実
発行者　朝日新聞社　藤田雄三
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　東京 大阪 名古屋 北九州　朝日新聞社
© S. Yamamoto 1972

0095-254072-0042

新版を出すにあたって

近代日本のある裏面史を描いたこの本が出版されたのは、〈明治百年〉といわれた昭和四十三年のことでした。あれからちょうど四年、その間にこの本は、三十五刷もされて紙型が磨滅してしまい、このたび新版を出すことになりました。うれしいことです。これも、多くの読者の方々の、有形、無形のご支援があったからです。

最近送られてきたある雑誌に、作家の倉科平氏がこんな意味のことを書いています。

「私の叔父がこの春路傍で倒れて急死した。この叔父は山家のおっさんには珍しく、若いころから読書家で、倒れた時もやはり本をもったまま死んでいた。その本は、山本茂実の『あゝ野麦峠』だった。叔父は、しきりにこの本を人にすすめて歩き、その日も読み終えられた本を持って、近所の女の先生を訪ねた帰りだった。叔父は、この最後の愛読書を棺(ひつぎ)の中に入れてもらって、冥土へ旅立った……」

また名古屋の主婦Kさんも、自分の小遣い銭でこの本を何冊か買って、だれからたのまれたのでもないのに、次々と新しい読者に回して読んでもらっているという。

そういえば、今度、高等学校の教科書(現代国語二＝角川版)に、この本の一節が収録されたのも、現場教師その他の方々からの強い推薦があったからとのことです。

こういう読者の方の話は、作者の私には、何ともありがたいことで、三十五刷という数は、こういう方々がいてはじめて可能なのだということを、改めて銘記させられました。

新版を出すにあたっては、その後の取材で入手した新資料の追加、事実の誤りの訂正、文章の整理、そして全国の読者から寄せられたおびただしい数の手紙による助言と資料提供などによって、旧版を全面的に書き改めました。

思えば、この四年間に「あゝ野麦峠」にもいろいろなことがありました。野麦峠記念碑の建立、民芸の公演、野麦峠の唄作曲、映画化の話等々（巻末「あゝ野麦峠その後」参照）。しかし、いま私がしみじみと感じていることは、民衆の英知とエネルギーということです。人間一人が、利口だ、有能だといっても、そんなものはたかが知れています。明治の文明開化も戦後の復興も、まさしく、この民衆の英知とエネルギーだったのです。

しかし、そのことに気づいた時には、私の取材に協力してくれた、あの野麦峠を越えた婆さまたちは、ほとんど亡くなられてもういません。この本は紙型が磨滅しても、新版に組替えることができますが、あの工女の婆さまたちは、二度とこの世に帰っては来ないのです。もし、取材時期を逸していたならば、おそらく、この本が世に出ることはなかったでしょう。

昭和四十七年十一月

東京・小平の自宅にて　山本茂実

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

新版を出すにあたって　1

文明開化と野麦峠

地図にないノウミ峠　9
生糸が支えた文明開化　11
赤い腰巻きにワラジをはいて　16
野麦の雪は赤く染まった　21
ああ飛騨が見える　25
臨終の床で聞いた老婆のうわ言　29

日清・日露戦争と野麦峠

ワラビ餅を売っていた鬼婆さ　34
恐露病と第二の元寇　39
平野村にあがった産業革命ののろし　44
素ワラジに紺モモヒキで越えた工女群　49
すりかえられた大和魂　53

古川の大火と野麦峠
古川の大火 59
古川の火事と謎の異人さん 62
焼跡の召集令状 67
旅順港陥落と百円工女 71
諏訪湖の哀歌
いろり端の約定証 75
諏訪湖の夜明け 81
熱湯と蒸気と騒音の中で 85
工女虐待の乱暴検番検事局送り 92
工女は泣くのが仕事だった 100
水車にひっかかっていた工女 106
弁天沖の哀歌
繭をごまかす購繭員の物語 112
工女争奪・山賊が出る塩尻峠 117
理解しにくい工女の成績 124
工女引抜きあの手この手 128
一斉に汽笛を鳴らして奉迎 136

どうせこの身は弁天沖の　140
天竜川の哀歌
天竜川の肝取り勝太郎　145
戦慄すべき工場結核　152
奇蹟と秘薬を求めて　157
天竜川に流されたコモ包みの嬰児　162
工女の残した唯一の記録
糸ひき唄からみた工女生活　169
〈無学〉が七〇パーセントの明治の工女　177
工女賃銀台帳からみた工女生活　184
野麦を越えてもち帰った金額　197
雪の野麦越え
閉業の汽笛が湖面に流れ　203
雪の峠路にタイマツは続いた　208
谷底に生きていた工女　213
吹雪の峠に野宿した三百人　218
老女の語る雪の野麦越え　223
美女峠の甘酒に生き返って　227

工女の故郷飛騨

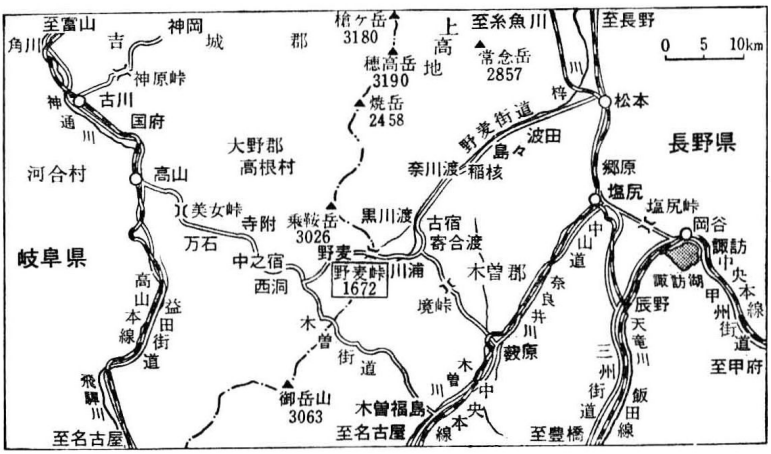
荷馬車は急ぐ中山七里 233
イノシシ乱れとぶ古川の初売り 239
貴船神社の荷札 243
〈八ツ三〉の荷受け 248
八ツ三を根城の工女募集 251
本光寺の玉垣に秘めて 256

女工惨敗せり

可憐な女工の歎願書 262
立ちあがった女工千三百名の怒り 267
異様な感に打たれた林重役の訣別 272
暴虐なる山一林組をこらせ!! 277
デマ「争議団が爆弾を投げる」 284
糸都岡谷に人道はなきか? 290
悲憤の涙に訣別の日は来た 297
峠の笹原を下る敗残の女工 303

興亡・岡谷製糸
岡谷製糸気質と人身御供 308
糸価波よりも高し 310
目にあまる外商の専横 316
生死業とセリ金さん 320
工場主も素ワラジにハッピ 326
それでも家の仕事より楽 333
いったい誰がもうけたのか？ 341
野麦峠のお地蔵様
ササの海で生んだ赤ん坊 347
石地蔵を背負って 352
地蔵様のナゾ 355
峠越えする工女の守り神 360
巨艦〈大和〉とともに 364
資料・糸ひき唄、他 369
私の取材メモから―「あとがき」にかえて― 389
「あゝ野麦峠」その後 395

装幀・熊谷博人



野麦峠関連地図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文明開化と野麦峠

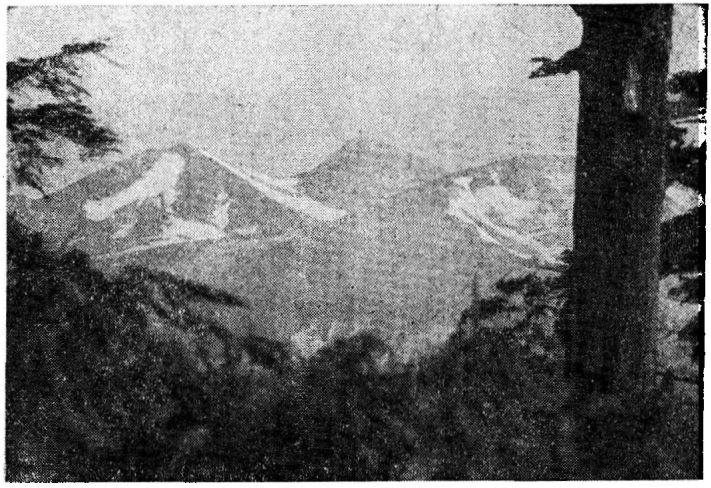
地図にないノウミ峠

日本アルプスの中に野麦峠とよぶ古い峠道がある。

かつては飛騨と信濃（岐阜県と長野県）を結ぶ重要な交通路であったが、今ではその土地の人にさえ忘れ去られた道になっている。

また〈野麦〉という名から、人は野生の麦のことかと思うらしいが、実はそうではなくて、それは峠一面をおおっているクマザサのことである。十年に一度ぐらい平地が大凶作と騒がれるような年には、このササの根元から、か細い稲穂のようなものが現れて、貧弱な実を結ぶ。これを飛騨では〈野麦〉といい、里人はこの実をとって粉にし、ダンゴをつくって、かろうじて餓えをしのいできたという。

「笹に黄金がなりさがる」という東北の民謡と同じもので、峠の呼び名もおそらくそこから出たもの



岳鞍乗の夏初む望から道サマクの峠麦野

であろう。

――もうだいぶ古い話になるが、ぼくは死んだバア様からよくこの野麦峠の話をきいた。もっともバア様はこれを〈ノムギ〉とは発音せず、いつも〈ノウミ〉といっていたから、後で日本アルプスの地図をひろげていくらさがしても、どこにもそんな名の峠はみつからず閉口したことを覚えている。

何でもバア様の話によると、そのクマザサにおおわれた峠を、幾千幾万とも知れないおびただしい数の飛驒の糸ひき（製糸工女）たちが五十人、百人と群れをなして越え、島々谷（しましまだに）（上高地登山口）へ下って、そこから諏訪湖畔の岡谷、松本、上田、佐久方面の工場へ向った。若い娘たちのこととて、そのにぎやかさはまるで五月のヒバリのようで、騒々しくもはなやかにもみえる行列が幾日も幾日も峠から岡谷や松本へ続いた。

みんな髪は桃割れに赤い腰巻きをつけ、ワラジば

きに木綿のハバキ、背中に荷物を袈裟掛けといういでたちで、五月春びきが終ると田植に帰り、またすぐ夏びきに出かけ、暮れ迫る十二月末には吹雪の峠路を飛騨へ帰っていったという。

しかし避妊具も普及していなかった当時のことで、数多い女たちの中には、みごもって帰る女も少なくなかったらしい。彼女らはだれにもそれを打明けられず、小さな胸を痛めながら、みんなの後に続いていくが、険しいアルプスの峠道はあくまで非情にこれをはばみ、油汗をにじませ、よろよろと列をぬけてササやぶにうずくまり、そこに赤黒い肉塊を産みおとした。さいわい丈余のクマザサはこの女のみにくい苦悶をやさしく抱擁してくれたが……

やがて肉塊は赤い腰巻きにつつまれたままササの根元にほうむられた。

来る年も、来る年も……

そしてだれがいつごろ建てたものか知るすべもないが、そこに小さな地蔵様が建ち、だれとはなく〈野産み峠〉というようになったと、これはバア様の話である。

明治から大正にかけて、国鉄高山線が開通(昭和九年)するまで、これは飛騨と信州を結ぶ交通路野麦峠にまつわる哀話である。

生糸が支えた文明開化

こんな話が生れた明治とは、いったいどういう時代だったのであろうか？

当時の貿易年鑑をみると、驚いたことに、その輸出の大半が生糸関係(生糸、絹織物、蚕種)で占められている。つまりそれより他に売るものがなかったということであろう。特に明治初年の貿易はこれが極端で、六〇パーセント以上が生糸関係で占められていた年さえあった(巻末資料2参照)。明治末期から大正、昭和にかけて日本産業は急速な発展をとげ、貿易も飛躍的に増加するが、そういう時期にさえ生糸は日本輸出総額の三分の一をくだることはなかった。

しかも忘れてはならないことは、この生糸というものは他の輸出品と違い、原料、技術のすべてが国内で自給出来たところに、明治の国際収支には大変有利だったということである。

一時期綿糸紡績が生糸に次ぐ輸出の花形になった時代もあるが、その内容は昭和十三年と十四年のたった二回綿花の輸入と綿糸布輸出がほぼ同額になっただけで、後は巨額な輸入超過で国際収支という面からは大変な赤字であった。こういうのを〈賃機(ちんばた)貿易〉という。資源に乏しい日本貿易はほとんどこれであった。

極端な〈不平等条約〉に苦しみながらも、黎明期の日本で、〈外貨効率一〇〇パーセント〉の品が全輸出の三分の一以上を占めていたということは、日本にとっていかに幸福な出発だったかがわかる。

しかし、これにはそれなりの犠牲がともなっていた。

人はよく御維新とか、文明開化と簡単にいうが、鹿鳴館(ろくめいかん)のはなやかさにしても、電信電話も、汽車も汽船も鉄砲も軍艦も、イルミネーションも、さては洋学洋書も、技術者を招いても、それには大変なゼニが必要だったはずである。そのゼニはいったいどこから持ってきたのか? ここが一番大事な

ところである。こういうことを無視して明治を論じても意味がない。

例えば明治政府がとった初期の官営殖産興業政策にしても、多くの〈外貨〉が必要だった。鉄道、鉱山、造船、海運、農蚕、その他諸工業等、ここに雇われてきた、いわゆる〈お雇い外国人〉の俸給は、明治七年政府統計でみると、太政大臣三条実美の八百円と同額のものが十人もいた。重臣岩倉具視の六百円、参議大久保利通の五百円よりそれぞれ二、三百円も多い額である。こんなのを含めてお雇い外人の数はそのころ政府雇いだけで五百人、民間雇いはもちろんもっと多かった。特に工部省のごときは通常経費の約三分の一が、この外国人技師の人件費に支払われていた（梅渓昇「お雇外国人」）。いかに巨額の〈外貨〉が日本近代化のもとでに支払われたかがわかる。

これは要するに明治の日本が最近の新興独立国のように、外貨はなくとも、貿易が赤字でも、東西両陣営から緊急援助や低開発国何とか援助が入ってきて、たちどころにつじつまが合ってしまうような結構なご身分ではなかったということである。場合によってはせっかく敷いた鉄道さえひっぱがされていたかも知れないし、それがいやなら横浜や神戸、長崎あたりを香港のように身売りするより道はなかったであろう。明治とはそういう時代であった。つまり〈生糸〉というものがなかったら、明治は当然もっと変ったものになっていたことはまちがいない。

ではいったいその生糸は、どこで、だれがつくっていたのか？

当時、横浜生糸問屋茂木惣兵衛が出した「横浜生糸検査所輸入調表」によると、明治十二年の横浜入荷高は第一位上野（群馬）、第二位信濃（長野）、第三位岩代（福島）、そして武蔵（主に埼玉）、甲斐（山梨）の

順となっているが、十三年になると、信濃が上野をはるかにしのいで第一位。次いで上野、岩代、武蔵、甲斐の順と変っている。しかもその内容を見ると、上野や岩代物がほとんど旧式な手挽き糸（座繰糸）であるのに対し、信州物は最新式の機械製糸によるものが主体となっていた。

特に諏訪湖畔の平野村（現岡谷市）はこの年（明治十二年）一村で機械製糸による全国生糸産額の一六パーセントも占めていた（「平野村誌」）。

またこれが昭和三年になるともっと開いて、「信州物生糸横浜出荷総数四一万二三九〇梱、これは実に横浜輸出生糸の五九・六パーセントに相当した」（「長野県蚕業史」）。もっともこの数字は、当時片倉製糸を初めとする岡谷の有力工場が、明治三十年代から盛んに県外進出をはかり、急速に巨大化しつつあったので、もちろんその分も含まれていたことが考えられる。

それにしてもこれらの生糸をひいていた工女たちは、いったい全国ではどれくらいいたか？「明治大正国勢総覧」（朝日新聞社刊）や「日本資本主義分析」（山田盛太郎）などで見ると、明治二十九年は、製糸業者全国総数四十万九千七百九十九戸、女工数五十九万三千八百九人、男工数三万二千五百七十一人、合計約六十三万人という大変な数となっている。しかしこれを戸数（工場数）で割ってみると、一業者の平均は工女約一・五人という何ともわびしいものであった。そして十人以上の工場は、全国でたった二千二百（明32）。

これが諏訪湖畔を中心に全国に展開した、わが製糸王国の実態であり、またそれは、明治の台所裏でもあったであろう。もちろん、京浜、阪神工業地帯はまだ生れていない。岡谷工女の何パーセント

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co